幼児の教育　第105巻　第12号　平成18年12月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

第105巻　第12号　日本幼稚園協会

2006 12

最新刊

50のキーワードでわかる

保育相談&育児相談

伊志嶺美津子　編著

子育ての悩みや不安を
抱えている親にとって
身近で最も相談
しやすい窓口が、
保育所・幼稚園です。
園がこうした相談に対応し、
子育てを支援していく方法を
キーワードに即して
解説します。

18cm×13cm
160頁
定価1,260円（税込）

396-01

【目次から】

しつけと虐待 虐待防止法／友だちと遊べない／発達・発育の問題／食事の問題
日常の中での相談／母親との面接／相談に来ない人／カウンセリングマインド
話の聴き方／カンファレンス／ノーバディズ・パーフェクト／指導しない
ロールプレイ／保育者であることと相談者であること　ほか

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻　第12号

幼児の教育

目次

——第一〇五巻　第十二号——

巻頭言　子どもの表現への大人のかかわり方
—音遊びをめぐる二つの場面から—……加藤富美子…（4）

特集〈保護者の保育参加〉
「お誕生日保育」で深まる絆……藤井　修…（8）
みんなでみんなを育てようの精神で……中村万紀子…（13）
「お父さん・お母さん先生」の活動を通して……寒河江よう子…（18）

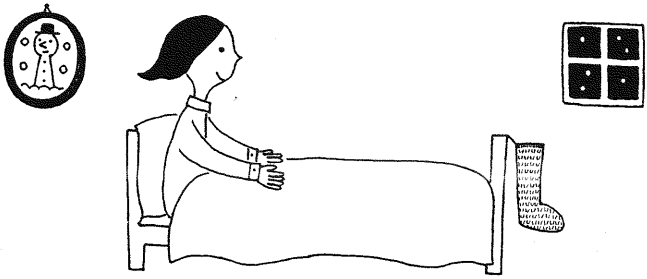
幼稚園百三十年記念企画　アーカイブズ『幼児の教育』（5）……（23）

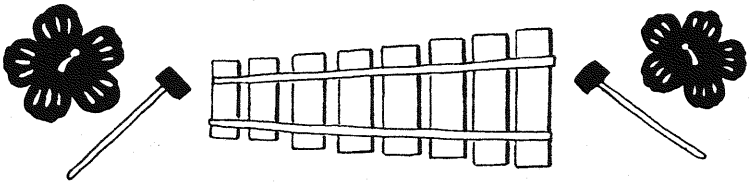
小学校の現場で感じたこと
—副担任としてのささやかな実践—……齋藤　美和…（28）

© 2006
日本幼稚園協会

私が通った幼稚園・保育園(15)「後の日のために」……坂本　起一…（34）
保育の変革を目指して(5)
―折々に考えたこと―……入江　礼子…（40）
担任とフリーの立場をこえて……杉浦真紀子…（48）
働く意欲が持てない？(2)
―ニート、フリーター―……耳塚　寛明…（54）
幼児の教育　第一〇五巻（平成十八年）総目録……（61）

表紙絵／さのまきこ
扉題字／津守　眞
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／さのまきこ
編集委員／浜口　順子・佐藤　寛子・吉岡　晶子・伊集院理子
編集部／河合　聡子





巻頭言

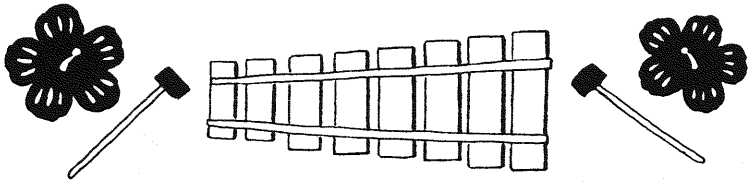
子どもの表現への大人のかかわり方

―音遊びをめぐる二つの場面から―

加藤　富美子

幼稚園の子どもたちと一緒にいると、子どもたちが遊びの中で見せてくれる、計り知ることができない感性や、途轍もない表現力に驚かされることがしばしばあります。小さな子どもだからこそ発揮することができる、新たな対象への新鮮で素直な驚き、その驚きをすぐさま表現できる力。これは、大人になった私たちには決して手にすることができない、小さな子どもならではのすぐれた特性でしょう。そして、このすぐれた特性を、さらに伸ばしてあげることができるのも、あるいはその芽をつんでしまうのも、私たち大人のかかわり方にかかっています。

最近、私たちの幼稚園で見つけることができた、音・音楽をめぐる二つの場面を紹



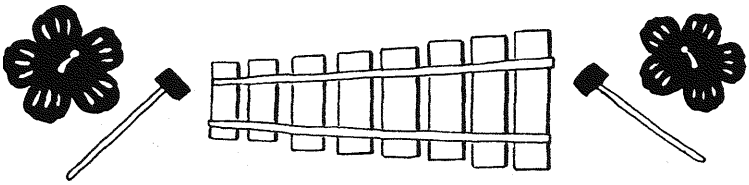
介しながら、子どもの表現への大人のかかわり方について、考えていきたいと思います。

一つ目は、竹を使った遊びの一場面です。附属の農園などから切り出してきた、いろいろな長さのたくさんの竹が外に並べられています。

子どもたちはまず、地面に並べた竹筒をバチで叩いてみていました。ただカチャカチャとバチと竹の表面がぶつかる音がするだけで、音の高さもまったく変わらないし少しも面白くないようでした。ちょっと触ってはすぐに離れていってしまいます。どうすれば、竹筒を響かせることができるかがまったくわからなかったからです。

そこで私がしゃしゃり出て、「長さが違う竹筒を縦にして持って、固い地面にそっと落としてみると、こんなにいろいろな高さの音を出せるよ」と、やってみせてあげました。でも、子どもたちは、竹筒を縦にして地面に打ちつけるという方法に、どうもなじめないようで、一向に興味を示してくれません。

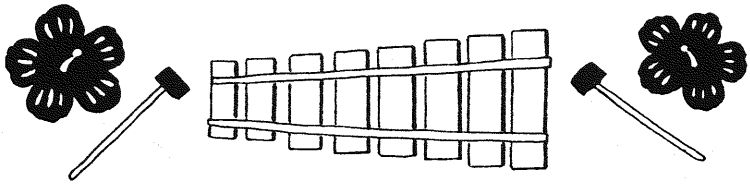
その時、一人の女の子が、「これはね、わたしの音だよ！」と、竹筒を紐で結んで空中に吊るして棒で打ち始めました。体を楽しそうに揺らしながら、一本の竹でいろいろなリズムをずっと打ち続けています。それを見ていたほかの子どもたちも、紐に吊るした竹で、いろいろな音を楽しみ始めました。



さて、二つ目の場面は、インドネシアのバリ島のガムランの楽器で年長さんが遊んだ時のことです。八、九人くらいのグループを六つつくり、一グループごとに大学が所有するガムランの楽器で遊んでみようという計画です。計画では、まずどんな音がするかを、子どもたち自身が好きなように楽器をいじって発見し、その後、グループで「音でお空に虹の橋をかけよう！」と音遊びをしてみようというものでした。

最初のグループで、この計画は見事に失敗ということがわかりました。何もモデルを示さずに楽器を好きなように触るだけでは、ただガンガン、ガチャガチャというすごい音響になってしまい、深いゴングの響きや、きらびやかな鍵盤楽器の音とはかけ離れたものでした。また、みんなで音の虹の橋をつくるために、何か一つ約束事をと考え、私がカジャールという楽器で等拍を打ち続けたところ、等拍に合わせることばかりに子どもたちの気持ちがいってしまい、生き生きとしたのびやかな音楽とは、かけ離れたものになってしまいました。

そこで、次のグループからは、「ゴングのおへその所をこんな風に静かに打ってみるとどう？」など、楽器の打ち方や、相手の音と音の間に入っていくガムランの合奏の方法を、お手伝いの学生たちと一緒に、モデルとして少しずつ加えてみることにしました。そして、最後のグループがつくり出した虹の音楽の何とすばらしかったこと!! ゴングの静かで深い響きに子どもたち全員がどよめきの声をあげ、またレヨン



という、お鍋を伏せたような形のものを長く一列に並べて音階にした楽器の前に二人で並んだ男の子と女の子は、「相手の音と音の間に入っていく」という手法をしっかりと生かして、見事で、そして一度も聴いたことがないような、すてきなガムランの響きの音空間をつくり出してくれました。

この二つの場面からは、子どもの表現力への大人のかかわり方として、本当に大切なことを教えられます。私が一方的に示した竹の楽器の奏法そのものには関心を示さなかったのに、それを見ていて、自分たちで工夫して生み出した竹の響きにはずっとこだわり続けていくという、子どもたちの素晴らしい表現力。

そして、私が打ち続けた等拍のリズムに合わせようとした合奏は、何とも力のないよどんだような音楽だったのに、ガムラン楽器の響きやガムラン音楽のモデルをちょっと示してあげるだけで、誰も聴いたことのないような、すてきなガムランの音空間をつくり出してしまう、子どもたちのすごい表現力。

こうした、子どもが備えている表現力を見つけ、それを育てていくために、私たちが手助けできることは何か、私たちがやってはいけないことは何かを、これからも一つひとつの場面を大切に考えていきたいなと……。

（東京学芸大学附属幼稚園）

特集〈保護者の保育参加〉

「お誕生日保育」で深まる絆

藤井　修

保育園の役割で、最も大切な任務の一つに、生まれたての赤ちゃんを育てる、乳児保育という分野があります。少子化対策の目玉ともいわれる今日にあっても、いわゆる乳児保育のあり方については、寝かせて授乳さえしておけば、狭い室内でも可能な保育とイメージされかねません。公的な保育制度を営利の育児産業のサービスに転換させようとする政府の委員会答申などに、その証拠をさがすことはたやすいことです。しかし、ここで紹介する保育は、その対極をめざして努力している例の一つだと思います。

産休明けからの長時間保育に取り組む

わが園の設立は一九八〇年です。当時まだ実施する園が少なかった零歳児保育ですが、集団保育の形態をとらざるをえないものの、「家庭的な特徴を決して失わないようにしよう」と方針を立て、今日に至っています。「家庭的」という意味は、少なくとも、「学校的でない」「ほっとできる」「私的な価値が大切にされる」という点にこだわると解釈していただければと思います。最近では、保育全般に敷衍(ふえん)してliving homeという言葉を訳し「くつろげる故(ふる)

郷」をめざすとも申しています。

その方針が、「親の手作りのものを保育に使う」という方法になり、「あの保育園に入ると離乳食用のエプロンから通園リュックまで、いろいろ作り物が多いので大変よ」という評判になりました。でも、実際に入園された皆さんは、「こんな機会でなければ子どもの物を手作りするなんてなかった」と、親になりたての時期を思い出す記憶の一コマになっていると確信しています。

初めてのお誕生日おめでとう

その零歳児保育の特徴の一つに「お誕生日保育」があります。「満一歳の誕生日に両親が仕事を休んで、保育園で一日保育士として過ごしてください」と求めます。柔軟に対応していますが、原則は次のようなもので、その意味では「やや学校的」です。

「必ず実施する」「実施日は誕生日の近辺」「両親が同時に参加」「ビデオやカメラを持ち込まない」「結婚式・出産・育児の写真アルバムを持参していただく」「自分の子どもと共に、自分の子ども以外の子どもの授乳・離乳食・睡眠・おむつ交換をする」「散歩に出かける」「手作りおもちゃを昼寝の間に作り、それで保育をしてみる」「昼食には保育園の幼児給食を食べる」というプログラムは二十年来変えていません。

保育園側も「園長が記録写真を撮り、記念として差し上げる」「離乳食の進行および家庭での食事について栄養士と懇談」「保育士と家庭のアルバムを見ながら懇談」を行います。

このような方法をとる理由は、子どもにかかわる大人同士の信頼関係を強めたいという願いがあるからです。そして、ホームページやパンフレットによる情報でなく、五感を伴った実体験で、子どもが生活している場と時間を確かなものにしてもらいたいと考えています。

特に、父親の参加には、たとえ仕事の都合で全部の時間が無理でも、努力して来ていただくことを優先しています。職場の理解を促すことや、日頃の子育て

が母親に傾斜している傾向を、この機会に改善してもらうきっかけにしたいなど、思いはいろいろです。

▲お母さんは、わたし。お父さんは、“おともだち”の担当です。

お誕生日保育ノートから

実施後の感想を綴ったノートは、十冊以上になりました。その中には兄弟で数年ごとに体験した比較などもあり、保育園の歴史を語る貴重な記録です。そこに共通する感想は、「わが子が一層かわいく、いとおしく感じることができた」という点です。生まれて最初の一年の発達には格別なものがあります。

「今日一日、落ち着いた時間の中で、元気に遊んでいるわが子の姿を見ていると、なぜか生まれた日のことを思い出して感動してしまいました」は、夜中から出産に付き合い、朝日の中でわが子を抱いた時の感激を書いたFちゃんのお父さんのものです。

「疲れたけど、面白かったよ。他の子どもの成長の早いところばかりが目に留まり、帰ったら特訓や！てな気分にさせられました。」と父親が書いている次のページに、「(散歩先で) 電車を見送る姿は本当

にかわいいですね。こんな慌しい世の中で、この空間だけはほんわかした空気が流れているって感じで、お世話するのも忘れてボーッと見入ってしまいました」と母親が書いています。両親の視点の違いがわかります。

日頃忙しく、子どもと一緒にいる時間の少ない父親は、「特に昼間のわが子がどうすごしているのかは、全く知らなかったという状態でした。正直、妻に任せっぱなしで気がつくと大きくなっている！そんな感じです」と述べ、最後に、奥さんに「いつもありがとう」と書いてありました。夫婦の絆も深まる機会です。

「保育とは何て創造的な職業だろう。でも……」

さて、わが子の保育時間とほぼ同じ一日を体験してみて、異口同音にでてくる感想は、「面白いけど大変な仕事」「特に体力的なハードさを実感しました」です。京都市での職員配置は、零歳児三人に一人の保育士、六人以上の零歳児に一人の離乳食調理員の加配と恵まれています。当日は、そこへ両親の二名が加わるのでやや保育力は上がりますが、それでも、てきぱきと複数の子どもへの対応をこなしていく保育士の仕事ぶりには、驚嘆の感想が寄せられます。一人のわが子にてこずっている母親からは、一度に何人もの子どもを昼寝に誘う保育士のリズミカルな手が「God hands」と評されたり、絵本の読み聞かせに一歳児が集中する姿は「子どもの言葉の力の芽生え」とともに保育士の語りかけの旨さに感心されます。そして様々な食べっぷりに気長に付き合って食事をさせている保育士には、その忍耐強い仕事ぶりに、「真似できない」と尊敬の念すら。

保育園と家庭では育児記録ノートを毎日交換し合っていますが、「実体験すると細かい部分がわかってよかったです」「お誕生日保育から約二週間経ちましたが、仕事中、時計を見ると『あー、今ならお散歩かな』とか『お昼寝』かなと思うようになりました。忙しい中でも自分の中でホッとなる一瞬です」と保育園のイメージが深まっていくのがわかります。

「上のお姉ちゃんからおいしいと聞いていた給食を食べてみて、本当においしかったです。一人ひとりの離乳食もちゃんと考えて調理してあるのには驚きました。特にわが子は食いしん坊ですので、毎日残さず食べているのにもうなずけました」は、ラーメン店主のお父さんから調理スタッフへの励ましです。

当然、親に保育園のすべてを見せる機会ですので、他の年齢のクラスへも視線は向くことになります。すると「どのクラスにももう少し人手が必要なのではないかと感じました」とか、「朝七時三十分ごろ子どもを預ける場合、異年齢児が同じ部屋に預けるように指示されます。そこはいつも生活している部屋でなく、馴染みの先生もおられるわけでないので子どもにとって不安が大きかったようです」と、長時間保育を時差勤務と混合クラスで運営している矛盾に、率直な意見を述べる関係にもなってきます。毎日、慌しく送迎をこなすだけでは、保育制度の仕組みや実際の保育士の配置基準には気づきにくいのが現実です。まる一日、園で親が生活するということは、子どもを取り巻く人的な関係も含め、保育環境に問題意識をもつ上で、とても意味があります。

「一日を終えて」

「本当にあっという間の一日でした。でもとってもとっても楽しかったです。仕事に行ってしまう父や母から預けられて、子どもたちはかわいそうという人もいますが、『何を！』という位、保育園での生活は子どもたちにとっても、いい時間だと思います。他の子どもたちとの接触で学ぶものの大きいこと、栄養のバランスの取れた食事、手作りおやつ、規則正しい生活リズム。家にいてほったらかしになることを思えば、園と家庭、先生方と親、このつながりさえしっかりとコミュニケーションがとれていれば、子どもにとってステキな場所だといえます」。

この言葉は親と保育士の絆を深めるものです。

これからも「どの子も大事」に保育していくことを続けていきたいと思います。

（たかつかさ保育園）

みんなでみんなを育てようの精神で

中村　万紀子

はじめに

私の園で、それまでの保育参観を改め保育参加に切り替えたのは、今から十七、八年前のことになります。その当時、保育参加に限らず、保育のあらゆる面で意識改革がありました。環境構成においても、保育にかかわる者の意識においても、クラスを超えて全保育者で全園児を育てていく気持ちを常に意識し、「みんなでみんなを」の精神で保育を展開するように努めていきました。

そういう流れの中に保育参加も生まれました。保護者が園の様子や子どもの様子を、月一回程度一斉に見に来る参観から、子どもと遊び、生活を共にする参加の方向へ切り替えました。その当時、もうすでに保育参加を実践しているという、ある幼稚園の取り組みを参考に、試行錯誤で始めていきました。それからずっと続いています。職員の誰も「やめよう」とは言いません。子どもたちも保護者も、次の保育参加を楽しみにしている様子も伺えます。きっといいことだから続いているのだと思いますし、意味があるように考え、より良いものにしていきたいと願っています。

四年前に勇気をだして保護者を視点に入れ、「共に育つ―子どもと親と保育者と―」というテーマでの研究に取りかかりました。正直に言って初めはおこがましい気持ちでした。しかし、保育・子育てには切り離せない保護者との信頼や家庭との連携について、保育参加を含めて、実践を丁寧に振り返るところから進めていきました。子育て支援に関する様々な取り組みが行われている中、私たちの園なりに確認できたことがあります。保護者が保育に入ることが、子どもの生活を豊かにするだけでなく、保護者の成長支援にもつながっていくことです。それを『もう一つの子育て支援　保護者サポートシステム』としてまとめました。ここではその一端を紹介します。

園での生活を体験する

保育参加では、実際に登園から降園まで保育に参加してもらい、子どもと一緒に遊んだり活動したりなど、からだを動かしながら、園での生活を体験してもらいます。全保護者を対象に、学期に一回ずつ行い、一日に参加する人数は一クラスに五人程度。ですから一回目の保育参加が終了するのに、一週間から十日間かかります。保育者が、やたらと頑張って良いところを見せようとか、保護者をお客さんあつかいにすると、不自然な保育となり、負担になりかねません。普段の保育のありのままの姿や貴重な子どもの生活であることを大切にし、その中に参加してもらいます。一緒に保育する者同士として受けとめています。

また、初めての保育参加の前には、オリエンテーションをします。保護者にとっては知らない保育の世界へ入っていくのは不安もあります。どう動いてよいか戸惑うこともあります。園生活の流れや子どもへのかかわり方、心積もりなどを事前に伝えておくことで入り易くなったり、具体的な遊びの様子を伝えることで楽しみにしたりするようです。「保育参加ガイド」という手引書を配布して説明をしますが、共に育てていきながら、疑問に感じたことなど

を一人で抱え込まずに、担任に聞いたり相談したりすると良いことなどを話します。

保護者は、園での実際の生活に触れ、いろいろな子どもの様子や子どもの世界の不思議さや楽しさ、保育の様子などを見たり、感じたり、知ったりする中で、安心したり、納得したり、保育の大変さや難しさを感じたりします。また、三回目の保育参加の頃になると、一年を振り返り、わが子だけでなく子どもたちそれぞれの成長を喜ぶ姿も見られます。

保護者の感想から　その①

◇喜んで登園してはいるけれど、どんなふうに過ごしているのだろう？　子どもの話すことを聞いてもピンとこなかった。実際に遊んで様子を見ることができ、こうやって過ごしているのかと、何となくだが安心した。（三歳児の母）

◇園のことは何も話さないし、「だれと遊んだ？」と聞くと「一人で遊んだ」って答えるので、本当に誰ともかかわらずに一人かと思っていたら、そんなことはなく、友達の様子を見たり聞いたり、ちょこちょこかかわったりしていて安心した。（四歳児の母）

◇毎日、色水を作っては大事に持って帰るので、またかと思っていたが、実際に作っているのを見て、こんなふうに一生懸命やっているから大事なんだなと納得し気持ちがわかった。（四歳児の母）

◇今まで「お母さん遊ぼう」とくっついて離れなかったけれど、もう友達の方が良くなったのか、離れてよく遊んでいた。できないことをすぐ「やって」と言っていたが、今回は一生懸命自分でやろうとする姿が印象的だった。（三歳児の母）

ミーティングで話し合う

保育参加終了後、一時間程度、その日参加された方と担任とでミーティングをします。それぞれの方が見たこと感じたことを担任が引き出しながら、話し合いが進んでいきます。話題は気になったこと、

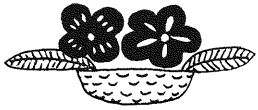
困った場面、発見したこと、楽しかった場面などいろいろです。具体的な出来事での話し合いを通じて、子どもの内面にある気持ちや要求の受けとめ方、友達の存在などを考えていく場にしています。あるお母さんの心配事を聞いて、「うちもそうよ」「そんな時もあったわ」など話が進みます。自分だけではないことを知り、気が楽になったり、先輩保護者の経験談に少し元気をもらい、自分の育児を振り返ることになったりもします。

真剣に話を聞き、素直に思いを伝え、心を通わせることを大切にし、保育者と保護者、保護者同士のつながりができるように願っています。

保護者の成長が見えてくる

初めての保育参加から回を重ねていき、学年が進むにつれて、ミーティングでの話題や話し方が変化していることに気づきました。一心同体のように我が子のことで一杯だった見方が、場面の流れや展開を話すようになり、他の多くの子どもの様子に目が届き、子どもの見方が多面的になってきます。

全体のことや、大きな視野での子どもの成長が見えるようになっています。わが子を取り巻く子どもたちの一人ひとりがかわいいと思えたり、どの子も大切な存在だと思えたりしてくると、その子に応じた対応をしようとし、子ども集団に応じたかかわりができるようになってきます。そして年長組になると、クラスの子どもたちを親全体が支えていくような関係へと展開し、力を発揮していけるようになっていきます。



保護者の感想から　その②

◇初めの子の時は、我が子の遊ぶ姿を冷静に受けとめられず、友達の言いなりになりがちな姿に歯がゆい思いをすることもあったが、年中、年長と友達の中で少しずつたくましく育っていくこともわかってきた。今回二番目の子の保育参加では、わが子にも

周りの子にも、同じ気持ちで楽しみながらかかわれたように思う。そんな自分に気づいた時、親として少し成長したのかな…と思う。（第二子の母）

◇子どもを否定するのでなく、受け入れてあげよう、いいところをたくさん見て、認めてあげようと思えるようになった。（四歳児の母）

◇園での最後の参加となり、小学校入学を控え、本当に成長した子どもたちにうれしい驚きを感じた。我が子だけでなく、みんな我が子の気持ちが実感できた。（五歳児の母）

おわりに

保育参加を通じて、子どもと保護者、保育者も一緒に育ち合う関係が創られていきます。私たちも親御さんの切なる思いを親身になって聞くとはどういうことか、教えるのでなく、伝え理解してもらうとはどういうことか大いに学びました。元気をもらうこともあります。

年長組になった保護者は、子どもたちのことが良くわかり、みんなの顔が見えて、どの子にも声をかけることができ、また手伝えることがあれば力になりたいと思っています。そこで年長組では、保育アシスタントに移行し、よりダイナミックな活動に参加して、グループで動いたり協力したりするところなどを支えてもらいます。そうした中で、役に立つ喜びや共に達成感を味わい、自己実現の場にもなっています。子どもたちにとっても、自分の親が、自分たちのため、みんなのためにと、汗を流し活躍している姿をうれしく誇らしく受けとめていくことだと思います。

『みんなでみんなを』の精神を大切に受け継ぎ、つないでいきたいと思います。

（山口大学教育学部附属幼稚園）

参考文献

友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園著『もう一つの子育て支援　保護者サポートシステム』フレーベル館　二〇〇四年

「お父さん・お母さん先生」の活動を通して

寒河江　よう子

「お父さん・お母さん先生」誕生

「お父さん・お母さん先生」誕生のきっかけは、海浜公園の遠足の計画案検討の時でした。担任から「海辺で思い切り遊ばせたい」「服が汚れることを気にしないですむように、水着に着替えたら」という提案があり「着替えを援助するのに時間がかかって待たしてしまうことになる」と話し合い、その時、園長の発案で保護者に協力を求めることにしました。

当日は着替えもスムーズに行われ、潮の引いた海岸のかなり遠くまで「お父さん・お母さん先生」に付き添われ、探検することができました。保護者に感想を伺いました。

「話を聞いた時は、幼稚園の先生がやるべきことをなぜ保護者に依頼するのか疑問に思った。実際に行ってみると、先生たちの仕事の大変さが良くわかった。水着に着替えて遊ぶことは良い経験だが、

先生たちだけでは無理だとわかった。親が付いて行くことで経験が広がるなら、良い計画だと思った」は、「お父さん先生」の感想です。

「お母さん先生」からは、「参観日に遊びの様子を観る時とは違って、子どもたちが親の存在を気にせず、のびのびと遊んでいて、普段の姿が観られたと思った。また参加したいと思った」との感想をいただきました。

翌年は前年度の経験から、年間計画を立てる際に「お父さん・お母さん先生」について、予め保護者の希望を聞き、年間行事に位置づけることにしました。保護者に手伝いを依頼するということの意味について検討し、教師の手伝いをする、子どもたちの経験の幅を広げることだけでなく、保護者の子どもの実態の理解、保護者同士のかかわりも大切な観点になると確認しました。

「お父さん・お母さん先生」を募集するに当たってはいくつかの留意点があります。「手伝いたくともできない」「みんながやらなければいけないのか」という思いをもたないように、と考えています。登降園は徒歩、保護者の引率が条件である幼稚園ですが、日中は仕事をしている保護者もいます。介護をしている家庭もあるでしょう。ありがたいことに下に弟妹のいる家庭が多い幼稚園です。手伝いができないことが気持ちの負担にならないようと願いました。

募集をした際、二歳児の弟のいる保護者から相談がありました。「この中で下の子がいても手伝いが可能なものはどれでしょうか」。幼稚園としてはこうお答えしました。「皆さんに必ずやっていただくということでなく、できる範囲で、とお願いしています。下のお子さんの時にも、お手伝いいただくこともできますよ」。保護者はこうおっしゃいました。「下の子の時には是非やりたいと思いますが、上の子どもの時の幼稚園生活の中で、何かお手伝いできることがあればと思います。子どもにとっては

上も下もないので、幼稚園の中で母親が何かにかかわっている姿を見せたいと思うのです」。

このお申し出を聞いた時、単に幼稚園の活動を手伝うということでなく、「できることから」「我が子のために」という思いに至っていただいたことで、活動のねらいの大きな部分が達成されたと思いました。

学区域が指定されている公立幼稚園にとって、地域でのかかわりも大切な要素となります。在園児の保護者同士のかかわりが深まることも大切であり、また、入園前の保護者とのかかわりも大事にしたいと捉えています。未就園児対象に遊びの場を提供している活動の中で、在園児の保護者にかかわっていただければ、相互の交流の場となり、未就園児保護者にとって安心感が得られるのではないかと、未就園児の活動も項目に入れました。

保護者と相談し、未就園児の活動に参加していただきました。未就園児の保護者と水遊びの準備や片づけをし、下の子を一緒に遊ばせました。この保護者はその後ＰＴＡ活動にも積極的に参加し、委員を引き受け、幼稚園を借りてバレーボールクラブを立ち上げました。

活動から広がりが

年間を通して「お父さん・お母さん先生」を募集しましたが、近隣の公園に行く活動は「近くである」「時間的に短い」という理由で項目に入れませんでした。当日、ある行動に気づきました。見送りのお母さんたち数人が、ずっと一緒に歩いてきます。横断歩道では子どもたちの誘導をしてくれます。信号がなくなるころ「いってらっしゃい」と声をかけ離れていきました。帰りの道でも横断歩道に立ち、幼稚園まで付いてきてくれました。お礼を言うと「いえ、お使いに行くついでがあったものですから」との答えです。

このことから、「お母さん先生」を経験したことで、保護者の方がどの部分を手伝えば良いかがわかったのではないか、近くであっても時間が短くとも、希望があるなしはともかく、手伝いを依頼すべきではないかと話し合いました。

次の近隣の公園に遊びに行く活動に改めて声をかけました。何人かが参加し、その中にお父さんもいました。黙って静かに子どもたちの活動を見守っていましたが、雲梯や鉄棒での援助の仕方は学ぶ点の多いものでした。若い担任は声のかけ方、タイミングに感心していました。子どもにとって、様々な立場の方にかかわっていただくことの大切さを感じました。

バス遠足の見送り・出迎えの保護者の行動もありがたいものでした。バスの乗車の際、入り口付近に立ち、他の車から子どもたちを守ってくださいます。芋ほり遠足の時はバスを待ち構え、荷物入れから芋袋を運び出してくれます。このことも実際に幼稚園の活動に参加し、どこを手伝えば良いかがわかり、特に確認することもなく、素早く、タイミングよくかかわっていただけるのだと捉えました。

手伝いの項目には「裁縫」も入れました。希望者の中に折に触れ、「何かやることありませんか」と聞いてくださる方がいました。三歳児のままごとのスカートを新しくしたいと思っていたのでお願いすると、早速かわいいスカートを作ってくださいました。お礼を言うと「我が家は男の子ばかりで、女の子の洋服を作るのが夢でした。私の方こそ良い経験ができました」と言っていただきました。

保護者同士の活動へ

例年、野菜を育て収穫の喜びを味わうことができるように計画しています。味噌汁やカレー作りにもお手伝いをお願いします。手を動かしながらも話の花は咲きます。韓国で生まれ育った保護者が、韓国料理についていろいろ教えてくださいました。その

うちに保護者同士、料理のクラブができました。各家庭を会場にそれぞれ得意な料理を教え合う交流が続きました。

併設されている小学校には「お茶室」があります。日本文化の伝承を園の特色として掲げていますので「お茶室」を活用し「お茶」を活動に入れようと計画していました。そこで、手伝いの項目に「茶道」を入れました。保護者から「お母さんではなく、おばあちゃんでもいいですか」とのお問い合わせがあり、喜んでお願いしました。いつもきりりとした着物姿でお茶を点ててくださる「お茶の先生」は、お孫さんが修了して数年が経ちますが、いまでもお茶の先生として活躍していただいています。

「お茶会」の手伝いの希望者は、お茶の経験のある方、初めての方と様々ですが、皆さんがお茶の楽しさを感じ取っている様子でした。自分たちもお茶をやってみたいという希望から、「お茶室」を借りて月一回の活動が始まりました。子育ての忙しい時期、月一回、二時間の活動であっても、この時間を生みだすために、どれだけ家事を工夫していることだろうと、楽しげに稽古される姿に頭が下がりました。弟や妹が続いて入園することで、保護者から保護者へ「お茶会」が脈々とつながっています。

きっかけは、子どもたちの安全確保、経験の幅を広げることでした。手伝いという形態では、それまでも折に触れ協力を仰ぎましたが、「お父さん・お母さん先生」として年間行事に位置づけたことで、「手伝っていただくこと」の意義について考え、共通理解を深めることができました。何より保護者の協力の姿勢、子どもたちへの思いに学ぶことの多い活動となりました。地域にある幼稚園として、保護者、地域と共につくる幼稚園を目指し、保護者と共に活動を充実させていきたいと思ってます。

（中央区立豊海幼稚園）

＊＊＊＊ 幼稚園百三十年記念企画　アーカイブズ『幼児の教育』(5) ＊＊＊＊

今回のアーカイブズは、「幼児の教育」第二十六巻　第六号（大正十五、一九二六年）に掲載された、園児の母親自らの貴重な保護者会の記録、大江政衞「保護者會に臨みて感じたるまゝを」の全文である（四十六～五十頁）。今号の特集テーマ「保護者の保育参加」にちなんで、八十年前の保護者と幼稚園の関係を振り返ってみたい。

保護者會に臨みて感じたるまゝを

大江政衞

「お母さん、明日僕はおやすみです、お母さん幼稚園にいらつしやい」と通知書をさし出す。

「〇〇のおだだを先生に申上げやうか……それともお悧巧な事計りにしやうかしら……」

「お駄々なんか嫌い、そんな事いつたらお母さんが叱られるよ」

など話合ふうちに其日も暮れて、翌七日午前九時といふに登園いたしました。

設備されたる遊戯室には、はやも幾多の保護者達が着席して居られました。空席に座して正面を見る、鐘輝さんの軸物、「テーブル」の上には五月人形や具足や菖蒲などが飾られてある、このやうな装飾は家庭以外には幼稚園ならでは味ひ得ぬ情趣であると感じました。

〇〇さんのお母さんは御出席であらうか、どの様なお

方様たらう？　○○さんは、どなた様が入らつしやつただらう？　などと愛児の友達から連想するお母様達もおなつかしく、このやうな時に、日頃の御教養振りや、御家庭での御様子など伺ひたいと切に感じましたが、さて御顔に見知りもなく、口切りも得せずさりとてもと勇気を起して、二三の御母様に御言葉をかけると、何れも何れも思ふ組の方々ではなく、少々失望いたしました。

せめては、めいめいが名のり上げぬまでも、保護者の場席も、あらまし組別にでもしてあれば、如何に交際下手な自分ごときものも、御懇談上便宜であらうになど、考へて居るうちに時はすぎて校長並に主事の御臨場引つづいての御話、一々身にしみて有がたく拝聴いたしました。

校長閣下よりの御話の要領は、此度文部省令によつて幼稚園の保育方針を明瞭にせられたのは、誠に教育上の一大進歩である。

幼稚園では、従来円満なる身体の発育と善良なる習慣を養成するのが主旨であつたのだけれど、今度の要旨に示されたものは、円満なる身体の発達を計る外に、善良なる性情を涵養するといふことを以って、其方針とせられた。

これはよほど幼児の内面的生活の上に、意味の深い事を教へられて居る。という様の御話であつたかの様に思はれました。

次に主事殿の御話は、実際多年の御経験よりしての御教示とて、一般的の事から、引て日々の細い実際事項についての御注意を、おきかせ下さいました。其要点は

1、目下登園児の出席歩合は至つて良好である其原因は季節の良好な事も一因ではでありませうが、一因には幼稚園並に各家庭の注意による幼児の健康と、日々の作業の興味とが、しらずしらずの内に登園をよろこばすものと思はれる。

2、出欠席の事は、学齢に達した教育ほどに、やかましく幼稚園では申しませんが、善良なる習慣を養成するといふ点より申せば、なるべく欠席は勿論、規定の時間におくれぬ様登園させてほしい。

3、服装の事は、以前の幼児に比べると、如何に軽快に運動に適して居るかは今更説明を要しない。どう

か今後も、現今以上の資質を以て華美にならぬやう希望する。

4、幼児に厚着させる事は、運動をさまたげ、時に発汗より冷却の際、往々寒冒を誘発せしむるおそれがあるから、なるべく薄着になれしめて、発汗を調節し、また帰宅の途、車中にうたたねなどした時には、通り風のあたらぬ様附添の者が細心の注意をせねばなりません。

5、体格検査の結果は、それぞれ御家庭に通知いたしますが、個人の治療までは、届かないのですから、愛児の保健上、何等かの故障あった際は、充分徹底的の治療を希望します。特に伝染性の疾病は、多数児童への関係も大ですから、一層の注意を要し、罹病中は勿論、予後の治療摂養をも充分にして、登園をいそがれざる様希望致します。

6、御弁当を開いて無心に食事する、幼児の心境を考へると、理屈ぬきの温情に其幸福を感じます、今後も特に注意して、季節がはりのため、また暑気に入つては、一しほ味の変わらぬやう、特に品質種類を選択して、調理し其分量にも御注意を乞ふ。

以上の事々は主に毎日起る実際上の御注意を伺つたので、これに次いで、やはり主事殿よりも、此度の要旨中に示された、善良なる性情の涵養といふことは、特別幼児の心情心境に関する内的方面の交渉で、よほど周囲のものが教養上に注意を要する事項であるから、家庭においても愛児の取扱は特に微細の御注意を乞ふ。

といふ様の御話であつたと記憶致して居ります。

此日先生の御話は「勿れ主義」でなく、何事も幼児の身辺に渉るさまざまの御注意、何れも積極的に「かくあれ」「かくあらまほし」「今後も一層の努力と御注意とを乞ふ」といふ様の御話振りで、「かかる事は困る」「こういふ事はよくない云々」とたしなめられるのでないだけに、保護者としての責任感は一層に力強く感ぜしめられました。

子供の性情を陶冶する責任者は、申までもなく其両親、ことにも母親が第一人者でございます。尤も祖父母兄姉教師も大に責任者の一員として考へねばなりませんが、しかし、親は子のためによりよい事を選びのぞみま

すが、一体何を子供のために求めるのが正しい道であらうか、よりよいものといふのは何であらう、評判のよい幼稚園に神かけての籤引に前祝をしたり、物たちをしたり、いざ検定となると、其心持は子供には想像もつかない、全く親の試練であります。

小学校、中学校、高等学校、大学と、つぎつぎの要求何が標準となつて母は働いて居るのでありませうか、誰れしも我子を愛する、愛すればこそさまざまの欲求もあれば、要求もする、それは如何なる場合にも正しい事計りでありませうか。これについて私はゼベタイの子の母の心情を想像し、また反省いたしました。ゼベタイといふのは、ガリラヤ湖畔に住む漁師で、其子にヤコブとヨハネといふ二人の子供がありました。この子の母はサロメといつて、其姉にマリヤといふ信仰厚い婦人もあるこのサロメとても日頃信仰のあつい知情意共に兼備の良婦人でございました。この婦人乃ちこの母が常に愛児の将来を思ひ、いろいろと考へぬいた揚句、或日其児等の恩師に向つて一生懸命に嘆願いたしました。

「師よ、折入つての御願を何卒きいて下さい、承ればあなたは、近く御一身に御栄誉を御受けになつて、王位に即かれる様に伺ひました、どうか其節には、師よ、私の愛するこの二人の子を、一人はあなたの右に、一人は左に侍らして御使ひ下さいませ。」とひたすらに御願ひいたしました。

子を思ふ一念、母の声としては、誠に切なるものではありますが、一面から申せば、身勝手な要求でありました。いひかえれば、我児を愛するあまりに、いままでは控えにひかへて居つた慎みから、勇気を起して師にねがつた唯一の要求は、かやうにやはり世間並で、王位につぐ地位高官であつたのでございました。

この要求に接せられた師は、速座に「汝等は求める所をしらないものである」とたしなめられ、つづいて深刻な御教示をあたへられました。これは有名な話でございます。私はこの話をきいて、自分もこの種の母ではあるまいかと反省せずには居られません。否この母よりも、より以下にあるでありませう、信仰の萌芽もなくて、望む事計りはこの母の如くにありはしないだらうか、さすれば何のとりえもない母ではありませんか。

サロメは子に引さるる愛に、一寸間違つた欲求を起しましたが、信仰あついこの婦人のさかしさは、すぐに身分の非をさとり、罪を悔いて、落ついた生涯に入りました。まことにうらやましい心がけであると存じます。

これによつても考へらるるは、幼稚園保育の要旨とする身体の発達並に善良なる性情の涵養といふことであります。これは全く自覚ある婦人の信念によつて、正しくつちかはれたものでなければならぬと思ひます。先づ其正しきを神の国にもとめて然る後に実施すべきでありませう。其方針をあやまり、其根本を忘れては、真に善良なるものは恵まれぬと観念せねばなりません。

まことにかどかどしい思ひも後日の思出るとここにしたためて此上の御導きを希望するしだいでございます。

（一部、仮名・漢字遣い等を改めた。編集部）

＊　＊　＊

大正十五（一九二六）年四月、わが国最初の幼稚園（のみ）に関する法令「幼稚園令」が公布された。この保護者会（「保護者会」という名称は意外と古かったのだ）はその直後のもので、幼稚園令の趣旨について「校長閣下」（茨木清次郎か）や主事（堀七蔵）から保護者に対して説明がなされている。大江はそれを拝聴し、母親としてのわが身の至らなさを悔いたり、責任感を新たにしたりしている。大正期を経て、「家庭教育」という言葉が市民権を得、「教育家族」が立身出世・学歴主義を追求する時代となっていたが、その中で、自分もサロメと大差ないのではないかと反省する大江の姿は、現代の多くの親に通じるだろう。大江が、せめて組別に座席が分かれていればよかったのに、と失望している姿は面白い。この時代の親も、ただかしこまって先生の話を聞いて満足していたわけではなく、親同士の交流をしたいと望んでいたことを知るからである。また「勿れ主義」でないポジティブな助言が保護者を力づけるという指摘も現代的で鋭い。

（編集部）

小学校の現場で感じたこと

―副担任としてのささやかな実践―

齋藤　美和

銀髪の美しい故川崎千東先生と出会ったのは、三十年前のことである。先生の著書『さわらび』（フレーベル館　一九八〇年）を読んで、また先生と同じ園で働く機会を得て、私も先生のように、銀髪になるまで、保育者として実践したいと願ったものだった。そして、子どもにとっても大人にとっても「幸せな保育」とは何かを求めて、夢中で子どもたちと生活した。

家庭の事情で、七年前にやむなく現場を離れたが、子どもたちとの生活が忘れられず、居住地のN市で、小学校一年生の副担任制度を発足させることを知って応募した。子どもの気持ちに寄り添い共感し、子どもと共に生活する幼児教育の場と、子どもに教えることを優先させる学校教育の場という大きな違いはあっても、子どもにとって何が大切なのかを考えて接するこ

とができるなら、幼稚園での経験が、学校教育の場できっと生きるはずだ、と考えての応募であった。

四年ぶりに接する子どもたち。学校生活初めの一歩で、子どもたちがつまずかず、スムーズに歩き出せるようにとの配慮から「副担任」制度は発足した。

しかし、実際の小学校の先生たちが願っていたのは「少人数学級」の実現だ。先生たちにしてみると、教室の中に他の人が入ってくることはあまり歓迎しないこと。それは、幼稚園で担任をした経験のある私にも理解できる。自分の教育の意図を理解して入ってくれる人ならいいが、そうでなければ、一寸厳しい指導をすると、「何で……」と思って子どもをかばってしまうかもしれない。また、子ども一人ひとりで状況が違うので、指導の仕方も一寸ずつ変わってくるが、それが第三者には理解してもらえないこともあり得る。私自身が担任をしていて、教育実習生を受け入れた時には、こんなジレンマを感じる場面がいくつもあった。しかしこの思いは、大人側の狭い発想で、子どもにとっては、いろいろな見方をしてくれる人がいる、ということはとても幸せなことではないかと思う。

私が配属になった小学校では、一年担当の先生方が、副担任を快く受け入れてくださったので、スムーズに仕事を始めることができた。小学校では、三年間副担任として子どもたちと生活した。

その時の子どもたちとの実践のいくつかを、ここに紹介したい。

T男とのかかわり

T男は、読み書きがまだ十分ではない。ひらがな表の順でないと読み方や書き方がわからず、そのたびに表を見ながらなので、作業も遅くなってしまう。教科書をうまく読むこともまだできないが、読みたい、書きたいという気持ちは強く、発言しようとの意欲もある。

しかし、家庭では父親が違う赤ちゃんの世話に母親が忙しく、また、入学前には「虐待」の相談も受けて

いたと聞いた。そんな状況での家庭は、彼の勉強への意欲を援助できるような環境ではなかった。私は、そんな彼の気持ちを汲んで、一緒に音読に取り組んだ。音読の宿題が出た時には、カードに題名を書けないので、家でやってくることができなかった（音読カードに自分で題名を書いて、家の人にチェックしてもらうことになっていた）。そこで、私が彼の読みたい単元の題名をカードに書くことにした。翌日「せんせいみてー」と、母親がカードに◎を付けてくれたところをうれしそうに見せてくれた。休み時間には、たどたどしくではあるが、教科書を読んで聞かせてくれた。今後の学習活動に、どんな効果をもたらすかはまだわらないが、やりたいという気持ちを後押しできたことはとてもうれしいことである。

T男については、担任の先生も配慮していた。彼は「虫博士」と友達があだ名するほど虫のことに詳しいのを、ちゃんとつかんでいて、音読のテストをする時には、彼には虫の教材を扱った「だれだかわかるかな」の単元を読ませたりした。彼の家庭の状況についても、副担任にもきちんと話して、一緒に子どもを育てていこうとの姿勢が感じられて、私も大変に動きやすかった。

M子とのかかわり

二学期後半になると、算数では繰り上がり、繰り下がりの計算になって、理解の早い子と遅い子で、大きな差が出てくる。M子は、何事にもスローテンポで、算数の五十問プリントをするのにとても時間が掛かっている。理解していないわけではないが、取り掛かりが遅く、時間ぎりぎりまで掛かって取り組んでいる。自分から「わからないからおしえて」と話すことは無く、この日も机間巡視をしていると、通り過ぎた時に、服を引っ張って目で訴えてきた。そこで、一つずつ問題を指で押さえて、「ハイ、これ」「ハイ、次」と問題を示してやると、自分で計算し、答えを書き始め

た。M子の場合、問題をやり終えるまでそばで見ていてほしいという気持ちの表れから、私の服を引っ張ったと思う。明らかにまだできない子、理解していない子、手の掛かる子には相当時間をかけて接し、説明したりなどかかわるが、時間が掛かっても自分で取り組んでいる子には、あまりかかわれないこともある。しかし、M子の「わたしのほうもみてよ」というサインを見逃さず、かかわることができたと思う。

このクラスの担任の先生は、この道三十年近いベテランである。国語での漢字の教え方や、算数での教え方などひとつずつ時間をかけて、噛んで含めるように丁寧に教えてくれる。大人の私も思わず授業の中に引き込まれてしまうことが多かった。

子どもたちには、自立して物事に取り組んでほしいとの気持ちが強く、困った時には、自分で解決することを求めていた。子どもたちもそんな先生の思いをわかっていたので、一生懸命学習に取り組んでいた。甘えたい気持ちを大っぴらに表さず、M子のような方法で示す子もいた。彼女は甘えることに飢えていたような面がある。先生もそのことは承知していて、時には厳しく、時には彼女をうまくもち上げて接していた。私も先生の方針を理解して接するように心がけていたが、この時には、彼女の気持ちに寄り添ってかかわることができたことをうれしく思う。

T朗とのかかわり

T朗は、授業時間になっても着席せず、教科書などの準備もしない。私は、そのつど働きかけて、教科書を出させたり、鉛筆を探したりするが（いつも筆箱にしまうことは無く、道具箱にバラバラに入っていたり、床に散らばっていたりする）、「うるせー」と言われたり、プリントを投げ捨てたりする。家庭の事情もあってか（三歳まで父母の都合で、父母とは離れて暮らし、祖母に育てられた）、発達面での遅れや情緒面での不安定さがあり、周りの子に不意に暴力を振るった

▲ぼくらの　かいけつゾロリ

りする。力も強いので、彼を恐れて近づかないようにする女の子もいた。しかし、全く勉強したくない訳ではなく、たとえば、音楽の時間にピアニカを演奏する時には、弾きたい気持ちが感じられたので、私が鍵盤に階名のテープを貼ると、一生懸命吹き始めた。

彼のできるようになりたいという気持ちを探して、励ましや援助を続けていたが、困ることをした時には、どのように話したらわかってもらえるのか見当がつかず、悩むことが多かった。

担任は、クラスの保護者からもたくさんの苦情を受けていた。「隣に座らせないでほしい」「同じ班にはしないでほしい」など。困ることをした時、担任はいつでも彼に優しく「Tちゃん、せんせいとってもかなしいな」と話して聞かせていた。遅れていた学習に、放課後、時間を割いて付き合っていた。優しい愛情を受けたことの無い彼に、時には叱ることもあったが、決して突き放すことなく優しく接していた。そんな担任

を、私は歯がゆく思ったこともあった。でもその時の彼には、あくまでも優しい愛情が必要だったのだろうと今は思う。

私もまた、彼の学習を何とか援助しようと努力してきた。みんないい子になりたいし、勉強ができるようになりたいと思っているのだ。悪い子になりたいとは誰も思っていないのだ。

私は、厳しさと優しさのバランスの大切さを、この担任の先生に教えていただいた。

「ミワセンセイてさ、どうしてそんなに
いろんなことしってるの！」

作品展では、幼稚園での経験を生かして「指人形」作りに取り組んだ。

導入から、作業の全過程を主になって指導することになり、子どもたちの前に立った。幼稚園の現場で幼児と共に作ったものを、一年生の発達に合わせて方法を変えて指導した。

自分だけの人形を作れることを、子どもたちはとても喜んで、一つひとつの説明を熱心に聞いてくれた。人形の頭に和紙を張る作業は、単調な繰り返しではあったが、徐々に形が見えてくると、やり遂げることの充実感を味わうことができ、生き生きと取り組み、前述のようなうれしい言葉を口々にかけてくれたのだった。

子どもたちにとっての副担任は、困った時「センセー」と助けを求めたり、我がままを言え、甘えられる存在だ。しかし、子どもの自立を願うなら、子どもに慕われる心地よさだけに安住してはいけないと痛感した三年間であった。このような難しさもあったが、自分なりに、幼稚園での経験を生かして、うまく担任との連携を図り、教育活動にかかわれたのではないかと思っている。

今は、機会があれば、子どもとかかわる現場に戻りたいと願っている私だ。

（お茶の水女子大学）

私が通った幼稚園・保育園(15)

「後の日のために」

―昭和十九年三月卒業　池の組―

坂本　起一

私が初めて東京女子高等師範学校附属幼稚園に行ったのは、昭和十六年の秋か、翌年の春だったと思う。私たち一家は、小石川区林町に家が建ったので、十六年の四月にその家に越してきた。そして、間もなく両親から、キイチも大きくなったから幼稚園へ行くのだと言いきかされ、幼稚園に入るには試験があって、先生に「あなたのおなまえは」ときかれたら、「なんとお答えするの」などと言われたりし始めた。

やがて、その日がきて母に伴われて幼稚園に向かった。今も変わらない正門を入り、大きな樹が植えられたロータリーのある大学の校舎に突き当

たって左に折れると、その先に茶色いレンガ建ての幼稚園があった。あの時、母と手をつないで歩きながら、右手に聳える大学の校舎が、威圧する要塞のように思えた。私はとても緊張していた。今から考えると、母も相当緊張していたに違いない。

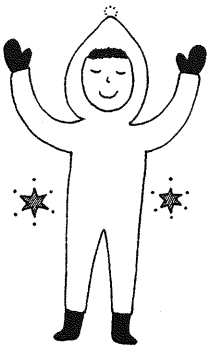
幼稚園の校舎に着いて玄関を入ると、床がぴかぴかに磨かれた廊下が真直ぐにのびていて、一番奥に大きな部屋があった。その部屋に入ると、右手に一段高い所があって、そこに子どもたちを前にして保護者が並んだ。何人かの先生がいらっしゃったが、そのお一人が「これからピアノの音楽が始まったら。子どもたちはお部屋の真ん中の方に進んでください」とおっしゃった。そこには、なわとびの縄や、大きな積み木などで半円形のコースができていた。そして、子どもは、一人ずつピアノに合わせてスキップをしながらそのコースを辿って帰ってくるようにと言われた。後に附属小学校の音楽の先生になられた福田先生がピアノを弾いておられた。

さて、ピアノが鳴り出して子どもたちは前に進んだ。私も一緒に進んだ。ところが、ふと私が振り返って母の方を見ると、母がハンカチを目に当てているのが見えた。とたんに悲しくなって、私は泣き出してしまった。母のところへ戻ってしまい、母や先生方がなだめても泣き止まなかった。コースをスキップでまわるなど、どうしてもいやだと言い張った。そして、とうとう他の子どもたちは全員テストを終えて帰ってしまったのに、私だけが取り残された。

すると、先生方がニコニコしながら、「さあ、やってごらんなさい」「できるでしょう」とすす

めてくださった。やっと落ち着きを取り戻した私は、ピアノに合わせて両手を拡げブーンと飛行機のまねをしてコースをまわった。「ほーらできるじゃありませんか」と先生方に笑われた。この後、眼鏡をかけた優しそうな男の先生、幼稚園主事の倉橋惣三先生に、「あなたのおなまえは？」ときかれる口頭試問があって終わりだった。

家に帰ってから、「今日は大失敗をした」と母が言っていた。私があんなに泣いてしまったのだから、落ちたと思ったのだ。だが、叱られたりしなかった。「私が涙を拭いたりして悪かった」と母は言っていた。幼稚園の入園試験の場で、親が涙ぐんでしまっては困るのだけれど、十七歳で私を生んだ母には、いろいろと言うに言えない苦労があって、子どもがやっと幼稚園に行く歳になったことへの感慨が目頭を熱くさせたのだった。



なかばあきらめていたが、入園を許された。両親、特に母は大変喜んだ。そして、毎日の送り迎えが始まった。

お昼のお弁当を入れたバスケットを提げて、母と一緒に幼稚園に通った。クラスは林の組。担任は上遠文子先生だった。先生は丸い眼鏡をかけた優しい先生で、私は大好きだった。

私は同じ年頃の子どもたちと遊んだことが無く、何時も大人にかこまれて暮らしていたため、元気のよい男の子が走り寄ってきたりすると、怯えて上遠先生にしがみつくことがよくあった。そ

れでも、幼稚園に行くのは決して嫌ではなかった。お砂場で山をつくり、トンネルを掘ったり、折り紙をしたり、クレヨンでお絵かきをしたり、テストの時に泣いたあの大きな部屋「お遊戯室」でピアノに合わせて歌ったり、遊戯をしたり、楽しい日が多かった。

「お遊戯室」のそばには藤棚があって、花の咲いた後には、細長い実がぶら下がるのを初めて知った。また、お庭の後ろは、高台になっていて、そこには、「お化けイチョウ」と呼ばれる大きなイチョウの木があった。天狗が住んでいるなどと言われると、本当かと思うほど大きな木だったが、秋になるとたくさんの実が落ちた。触るとかぶれると注意され、私たちは触らなかったが、先生方は、臭いその実を拾って水に漬け、銀杏にしてくださった。その銀杏を顔にして、色紙で衣装を作り雛人形を作ったりもした。楽しい日々が続いていた。

ある日のこと、皆が「お遊戯室」に集められた。そして、先生が「幼稚園の近くで天然痘に罹った人がいますので、これから皆さんに種痘をします。腕に少し傷をつけるだけで、痛くありませんからね」とおっしゃった。私はドキッとしたけれど、我慢して皆とお医者様の前に並んだ。だんだん自分の順番が近づくにつれ、恐怖心が募ってきて、いよいよ自分の番になった時、種痘は嫌だと泣き出した。家に電話がかけられ、母がとんで来ることになった。その時、「さあ、泣かないで男の子でしょう」と言いながら私を抱きしめたのが及川ふみ先生だった。私の記憶違いでなければ、当時、先生は幼稚園の副主事でいらしたと思うが、威厳に満ちた近寄りがたいところのある先

生だった。その及川先生に抱きしめられてしまうと、初めはじたばたしていた私は、気が静まって恐怖心が薄れてしまった。そして先生に抱かれたまま種痘を受けた。あわててやってきた母が幼稚園に着いた時は、騒ぎがおさまっていた。

泣いたり笑ったりして通ったあの幼稚園の日々は、いま一冊のアルバムになっている。当時のアルバムがみなそうであったように、黒い厚紙でできた台紙には、美しい筆跡の白い文字で「賀陽宮殿下　御成」昭十七・六・廿九とか、「お池の前で（入園当初）」昭十七・五・廿二とか、「久米川農園遠足」昭十七・十二、また、「お雛まつり」昭十八・三・三、「防空訓練」昭十八・七・十五などと書かれている。写真には、倉橋先生、上遠先生、及川先生、そして何人かの教生の先生が一緒に写っていらっしゃる。私のかいた絵や、はり絵も貼ってある。懐かしい日々の記録だ。そしてアルバムの最初のページに「後の日のために」という倉橋先生がお書きになった前書がある。

後の日のために

わたくしたちが　大きくなる日には、日本ももっと大きくなってゐます。—かういって皆さんが歌ってゐるのを聞く度に、先生の心は喜びでいっぱいになります。ほんとうに　そうなんですよ。ほんとうに、そうなんですね。

皆さんの二年間の幼稚園は、いつもの幼稚園ではありませんでした。通園の途もらくでありませんでした。お母さま方のお心づかひも容易でありませんでした。防空服で往復されたことも幾度もありましたね。送り迎へをして下さる

お母さま方も。

それでもよく登園されました。そうして　いつも楽しく遊ばれました。先生も皆さんと始終楽しく遊びましたね。――わたくしたちが大きくなる日には、日本ももっと大きくなってゐます。――皆さんの、あの歌に、いっぱいに声をあわせながら。

後の日、即ちその日のために、この記念帖をつくって下さった先生に代って、短い前がきを書きつけて置きます。

昭和十九年三月

幼稚園主事室にて

倉　橋　惣　三

東京が空襲で焼ける直前、戦争の悲劇が日本全土を覆う時代が始まっていた。幼い私たち園児を目になさりながら、先生は大人が感ずる暗闇の向こうに、園児たちの成長とともに明るい未来を見つけようとなさっていたのだという気がする。

およそ六十年前に幼稚園に通っていた私たちは、いつか大きくなって、子どもを幼稚園に送り、やがて孫も幼稚園児になるほどの年になった。

懐かしい幼稚園のアルバムを開くたびに、倉橋先生の「後の日のために」を読み返す。私たちの世代は、あの倉橋先生が見つめていらっしゃった明るい時代をつくってきたのだろうか。今は亡き先生に伺ってみたい。

（冨山房）

☆このシリーズは、今回で終了いたします。

保育の変革を目指して(5)

―折々に考えたこと―

入江　礼子

園内研修の難しさ・担任とフリー

園内研修は全員参加の鉄則

P女子大学幼稚部では五年間、原則週一回の園内研修をフリー保育者も含めて、全員参加を鉄則にやってきた。ことの是非はともかくとして、そうしたいという私自身の強い思いがあった。

その思いを支える原点の一つは、愛育養護学校・母子愛育会家庭指導グループでの実習生・アルバイト・嘱託職員としての話し合い参加への経験である。実習生・アルバイト・嘱託職員はいずれも正規職員ではない立場である。しかし、愛育では、校長から実習生まで、保育後に共に保育を担い合ったすべての人が、「対等の人とし

て尊重され」話し合いが行われていた。学生時代のこの経験は深く私の意識に潜行した。幼稚園の実践現場で園長としてマネジメントを任された時も、この鉄則は貫きたいと考えた。

さらに加えていうと、もう一つ、どうしても全員参加の形にしたいと考えるようになった経緯がある。

幼稚園・保育所の園内研修の外部講師として

P女子大学幼稚部園長を兼任する前、私は時々、研究指定園になった幼稚園や保育所の講師のような役割を担って、園内研修に参加させていただいたことがあった。特に公立の幼稚園では、研究担当の先生方が中心となって研修を進められており、学期に一度程度の「講師を招いての研修」の際に、講師としての役割を期待されて発言を求められる場合は「自分でもなんだか的外れな発言をしている」という罪悪感にも似た気持ちを抱いたことが一度ならずあった。果たして役に立っているのだろうか？　そんな気持ちになってしまうのである。

ある出来事

それには理由があった。私がまだこのような園内研修の講師としては駆け出しの頃のことである。午前中の保育参観が終わり、午後の園内研修のセッションに入る直前のこと、「それではお先に失礼いたします」（介助のフリー保育者Aさん）「あっ、どうもご苦労様」（O園長）という会話が交わされ、その園のフリー保育者は園内研修には参加せずに帰宅の準備を始めた。

まだ駆け出しだった私は、O園長に「なぜ、フリーの保育者は園内研修に参加されないのですか？」と単刀直入に聞いた。するとO園長は、「ここではフリーの保育者はアルバイトで時間給なのです。園内研修にまではお金を出すことができないので、研修への参加を要請することはできないのですよ」と言われた。

私はそれでも納得ができずに「ご本人に聞いてみたら

いかがですか？　ボランティアでの参加ということもあるのではないですか？」と思わず言ってしまった。O園長は私を立ててくださったのか、ロッカーで着替えをしていたフリーの保育者Aさんに「今日の研修会に参加しない？　無給なのだけれど……」と聞いてくださった。

Aさんは「本当に参加してよろしいのですか？」と遠慮がちに言われたが、「講師の先生もそうおっしゃっているから」というO園長の言葉に促されて、参加することになった。初めのうちは担任の話の熱心な聞き手に回っていたAさんであったが、彼女のついているB君の話になると、担任がつかんでいないような場面のB君の様子をこと細かに説明され、私たちその場の参加者はなるほどと思わされた。と同時に、私はちょっぴり職権乱用ではあったけれど、Aさんに参加していただいて、一つ深まった研修になったと内心嬉しくなった。

公開園内研修会でのこと

この園での三回目の園内研修はその町のすべての園にも公開され、午前中は「公開保育」、午後は「公開園内研修会」ということで行われた。午前中には各園から代表の保育者が保育参観を行い、午後のセッションには各園の園長・主任も加わった。

この園では、私の発言以来、フリーのAさんも参加している。この日もいつものようにAさんも研修の席に着いた。その時、それに気づいた他園のC園長が「この研修会にはフリーも参加するのですか？　もう勤務時間が終わっているのに、これはおかしいですよ。園長先生はどうお考えなのですか？」と切り出された。

多分、この町ではこういうケースは今までなかったの

だろう。O園長が今までの経緯を説明してくださったが、C園長はそれには納得されなかった。そういうことが会の始まりにあったためか、この日の研修会はこの町の実力者園長であるC園長の、この園に対する批判と、小学校校長経験者であるO園長の園運営と、教師指導の視点に対する批判に終始する会になってしまった。駆け出しだった私はおろおろするばかりで、内実のある話し合いにもっていくことはできなかった。会が終わってからそのことへの反省で身の縮まる思いをした反面、なぜフリーの保育者が園内研修に参加することに対してそれ程までの抵抗があるのか理解できなかった。

その後の、この園とのかかわりの中で、公開園内研修会がそのような経過を辿ったことの裏には「幼稚園教諭から園長になったいわゆる生え抜き園長」と「小学校の校長上がりの園長」との間に微妙な対立があることや、アルバイトのフリー保育者の中にも、時間外のことは一切参加しないというスタンスの人もいることを知り、ことはそう簡単ではないとは感じるようにはなった。しかし、保育という仕事は、いわゆる「仕事」の域を超えることもあるという柔軟性をもたない限り、面白さにまで到達しないこともあるという考えをもっていた私はなんとなくすっきりしないままであった。

「チーム保育」についての研究保育へのかかわり

それから二年たったある日、先のC園長から電話が入った。その内容は「チーム保育」をテーマに二年間の研究に取り組むことになり、その研修の講師を頼みたいというものであった。私は二年前のこともあり、よくお話を伺ってからということで、引き受ける前にその園を訪ね、C園長と話し合う機会をもった。

私の中には、二年前のC園長に対する先入観もあり、引き受けるにあたっては「いわゆるフリーといわれる保育者も園内研修には参加できるように配慮してほしい」

と伝えた。テーマも「チーム保育」ということであれば尚更である。

この時、C園長は「もちろん」と答えてくださった。この園には四人のフリー保育者がおり、学期に二度ほどの園内研修の折には彼女たちも参加して行った。園内研修の席でわかったことは、毎日一緒に保育しているにもかかわらず、担任とフリーではあまり話し合いがなされていないことであった。確かに勤務時間の制約ということもあるかもしれない。

しかし、研修の折に話されたことの中に、担任とフリー保育者の経験と年齢の違いということがあった。この園では担任は全員二〇代である。一方フリー保育者は四人とも四〇代前半から半ばであり、いずれも幼稚園教諭と小学校教諭の経験者であった。さらに加えて、全員子育て経験者だったのである。ある意味では、経験豊富なフリーに支えられて保育が成り立っていたともいえるが、担任にしても、年上の経験豊富なフリー保育者と、どう付き合っていくかという迷いもあったであろうことも想像に難くない。担任も、フリー保育者も、どちらも人に気を使う人たちである。お互いに気を使うあまり、肝心の子どもについての話、保育についての話ができにくい状況にあったということがわかった。

回を重ねるごとにその遠慮を乗り越えて、少しずつ話し合いが進んでいった。たいてい、午後一時半から四時半くらいまでの話し合いであったが、この二年間で、みんなで話し合っていくという機運が盛り上がっていった。チーム保育をテーマに選ぶことで、少しずつチーム保育の基礎ができていったのである。その実践研究の文案の多くの部分を書き上げたのは若い担任たちであったが、それを側面から支えたのはフリー保育者たちであった。

「チーム保育」研究その後

二年の研究期間が終わり、報告書も無事に発行でき

た。この調子でこの園が進んでいけば、子どもたちに質の高い保育が保証できるのではないかと考えていた。

それから一年経った六月のこと。私は教育実習の担当教員としてこの園を訪れた。C園長は転勤で他園に移動されていた。担任も一人入れ替わっていた。しかしフリー保育者の四人はメンバーが同じであった。ちょうど二時の降園時間と重なったが、私は新園長とお世話になっている学生について話をしていた。すると突然「では、園長先生、お先に失礼いたします」と四人がそろって挨拶され、帰宅された。私はあれっ、と思って新園長に伺ってみた。「最近、フリーの方たちは園内研修に参加されているのですか?」(私)「えっ、だってフリーの方たちは勤務時間が決まっているじゃありませんか。延長をしていただくわけには参りませんよ」(新園長)

「……」(私)。

「元の木阿弥」とはこのことか。あんなに担任とフリー保育者との話し合いの大切さを感じたはずなのに……。現場から立ち上げた研究は現場がそのことによって変革されていかなければ意味がないのに……。どうしたら、自分たちが取り組んだ実践研究が実践を変革していくものになるのか。外部講師にはいったい何ができるのか。この時ほど、これらのことを考えさられたことはなかった。

P女子大学幼稚部の園内研修

愛育での経験と、保育実践に対する外部講師としてのこの苦い経験から、私は、任されたP女子大学幼稚部では、園内研修にはどんな雇用形態であろうと(正規職員であろうと非常勤職員であろうと)、保育の核となる園内研修には全員参加を貫くことにした。

しかし、全員参加でやってみて気づいたことがあった。それはいくら参加していても、発言は園長・副園長・主任といった年長者や三〇代の保育者からが多く、一番若い二〇代前半の保育者からの発言はほとんど見ら

れないという状況が多くあった。形だけの全員参加で意味があるのか。そんな気持ちにさいなまれたことも何回もある。しかし、その後工夫を繰り返し（詳細は「保育の変革を目指して(4)」第一〇五巻　第十号を参照ください）、園内研修はP女子大学幼稚部の保育の要となっている。

担任とフリー保育者

若い保育者が多いP女子大学幼稚部のような園には、しっかりとしたフリー保育者が欠かせないと考えたのは、先にも述べた園内研修の外部講師をしていた時の体験が大きい。ほとんどが二〇代という担任を支えるのは、園長・副園長というマネジメントの立場にある者だけでは足りない。若い保育者を支えるのには、特に保護者が安心感がもて、子育ての先輩と感じられる人材が必要である。更に保育実践の経験をもっていれば尚更よい。いろいろな形で若い保育者を支えるために、よい人材を探そうと考えた。私は実際に自分がかかわったり、紹介をいただいた人を口説き落とすという形で、この五年間に数人の三〇代、四〇代、五〇代のフリー保育者に来ていただいた。

みな、それぞれに特徴があった。

三〇代のフリー保育者は他園の主任経験もあり、何より若い担任と年齢が近かった。このフリー保育者には、新たに形を変えた生活発表会にどうしたら子どもたちの良さや、発達課題を盛り込むことができるかについていっぱい知恵を借りた。新任の保育者のトレーナー的な役割を二年継続してとってもらった。若い担任にとって、保育技術の習得も含めてよい手本となった。

しかし、十年以上の経験があり、あまりに身近で、若い担任たちはこのフリー保育者につくと、声色、しぐさまでこの保育者とそっくりになってしまうことも多かった。「真似ることから学びが始まる」と考えれば当然のことであるが、ある意味では「弟子になりすぎる」怖さ

を伴っていることがわかった。つまり、若い人同士なので対等であるかといえば、そうではなく、このフリー保育者が意識するしないにかかわらず、完全に話し合いは一方通行、つまり、高きから低きに流れるのみであった。これは経験不足の私には予想のできなかったことであり、「双方向の会話」が、技術、経験に差のある人のところでは非常に成り立ちにくいものであることを思い知らされた。本当に難しかった。

では、四〇代、五〇代のフリー保育者の場合はどうなのか。年齢的には、若い保育者の母親の年齢に当たる人たちである。実際には保護者、特に母親との対応のところで、安心感を与えることも多く、大いに助けられた。

だが、しかしである。担任は保護者が自分に子どものことを相談してくれないと悩み、その一方で、時に、フリー保育者も、もう少し担任が母親の気持ちをわかってあげたらという思いと、担任を立ててあげなくてはという思いがあいまって、この二者の間にコミュニケーション不全が起こることがあった。経験もあり、年も上のフリー保育者と担任の難しさはわかっているつもりであったが、これは想像以上であった。もっとも、難しい、難しいとばかりも言ってはいられない。フリーという立場の不安定さを支えつつ、フリーでなければできない仕事を、私たち園長・副園長が提案することもしばしばであった。

「かたち」と「内実」

こうして、ぶつかっては考え、考えしながらの五年間であった。園内研修では、全員参加の「かたち」を貫き、貫きながら、その中身が熟するのを待ったことになる。担任とフリー保育者の関係も、また時々の難しさを一歩ずつ乗り越えながら、「真」の対等を目指して（もちろんこれは到底到達できる課題ではないが、だからこそ）きた道のりこそがP女子大学幼稚部の保育の中核をなしているといえる。

（共立女子大学）

担任とフリーの立場をこえて

杉浦　真紀子

担任の立場でかかわる

私は、昨年一年間、三歳児クラスの担任をしていました。本園では、一日を通して子どもの遊びを中心とした生活を送っているため、登園後、自分の好きな場や遊び、人を求めてさまざまに出かけていく子どもたちを把握するのに必死な毎日を送っていました。当時のクラスの様子はといえば……。男の子の多くは入園当初から園庭、ホール、他学年の保育室と、好奇心旺盛に園舎中を駆け回っていました。逆に多くの女の子と数名の男の子が保育室に残り、担任保育者のそばで何かを作ってもらったり、一緒にままごとをしたりすることで安心して過ごしていました。そして降園間近になると、保育室の外で活動的に動き回っていた人たちが、泥まみれになり、まだまだ遊びたいと駄々をこねながら、年長児や他の保育者に手を引かれて保育室に戻ってくる……というのがいつもの光景でした。

私はいつも、外から戻ってくる人たちに、〝今日はいったい何を楽しんできたのだろう？〟と、着替えや帰り支度を手伝いながら、思いを馳せていました。本園の園舎の構造から、最も奥まった位置にある三歳児の保育室にいると、園庭も他の保育室の様子も、殆どといってよいほどわからないのです。三歳児の特に一学期、担任保育者は、園生活に不安を抱いている人たちへの対応に追われて、どうしても保育室に縛られがちです。心では保育室を飛び出していった人たちの様子が気がかりで、あちこちと動き回りたいと思っているのですが……。

しかし、そこをうまくフォローするのが、フリーの保育者であったり、他学年の保育者たちであったりするのです。本園には、担任以外にもフリーの保育者が数名います。保育者全員で子どもたちの成長を支えるという意思統一がなされているので、自分の目の行き届かないところでも、他の保育者がその場にいて保育をし、またその場での情報を提供するという現状に、信頼と安心を感じて保育に臨むことができます。

さて、三歳児も一学期後半から二学期にかけては、心の拠り所がずいぶんと増し、生活範囲をぐんぐん広げていきます。担任保育者や保育室を頼りにしていた人たちも、安心感が増すとともに視野が広がり、自分で、あるいは友達と一緒に、いろいろな場へと出かけていくようになります。おかげで、私自身も保育室以外で遊ぶ人たちとのかかわりを求めて、いろいろな場を往き来することが可能となりました。そして、気になる人には時間をかけてかかわりながら、一人ひとりがどんな場で、どんな思いで遊びに夢中になっているのかを、私なりに見て感じることができるようになりました。

その一方で、お弁当や降園時間を考えて一日の生活の流れをつくっていくことを念頭に置きつつ、ま

だまだ不安になりがちな人への対応も……と、あらゆることにアンテナを張り巡らしながら動いている担任にとっては、〝この場（遊び・人）に、もうちょっとかかわっていられたら……〟という思いを、抱かずにはいられない毎日でもありました。

それでも三学期には、子どもたちが安定感に支えられながら充実した時を過ごしているという手ごたえを感じられるようになり、私自身、一人ひとりが年中に進級するにあたって抱える課題を見据えながら、ゆとりをもってかかわることができることに喜びさえ感じていました。

フリーの立場でかかわる

さて、今年になって私は、学年を引き継ぎつつも、立場はフリーとして保育をすることになりました。四月、年中に進級したとはいえ、新しい保育室に新しいクラス（三クラスから二クラス編成へ）、そして、新しい担任……さらに数名の新入児を加えて、やはりそれぞれが安定感を得るまでには多少の時間を要しました。その間、担任保育者は〝先生、あれして、これして！〟と頼っていく人たちに囲まれて保育室に釘付け。そんな中、私は早々とホールに出かけていく子どもたちの後を追っていくという、これまでの担任とは相反する動きをすることになるのでした。

A男の姿から見えてきたこと

ホールの中心は、なんといっても大型積み木です。四歳児のホールでの姿としては、五歳児がいとも簡単につくってしまう二・三階建ての立体的な、背の高い基地に憧れを抱き、今年になって「あんなのつくってみたい！」と挑戦する人が増えてきました。また、初めて大型積み木に触ったという人もいたので、担任が保育室から離れられないでいる時期

に、私は同様に、ホールで積み木を危なっかしく扱う人たちのそばから離れられずにいました。

その中に、昨年私が担任をしていたA男の姿がありました。A男は入園当初から、友達を心の拠り所として活動的に動き回っていた人でした。たいてい、幼なじみ、あるいはクラスで仲の良い友達と行動を共にしていて、ホールでは昨年のうちから二階建ての基地づくりに挑戦するなど、クラスの中でも勢いのある人でした。年中に進級し、仲良しの友達とクラスが別れてしまったけれど、新たな友達関係を築き始めているところでもありました。

そんな彼の遊びに、私はフリーの保育者として、ホールで丸一日、さらに数日とじっくりかかわるチャンスが到来したのです。ところが、様子を見れば見るほど彼の言動に??? 一例を挙げてみると……。

「デカレンジャーごっこする人、集まって〜！」

「基地つくるから、みんな手伝って〜！」

と、威勢よく声を張り上げるのは、私の想像通りの姿です。しかしA男はその先、大型積み木一つ触らず、周囲の人たちが積み木を積むのを見ているのです。私は、基地づくりに一番詳しいのはA男だとばかり思っていたので、率直に、

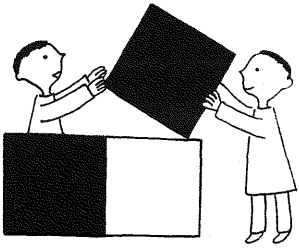
「A君はつくらないの？」

と問いかけてみました。すると、

「あ、そっか！」

とA男は言い、積み木を一つ運んできたのですが、次にそれをどこに置いたらよいのかわからない様子でした。

〝A男はたしか、昨年から二階建ての基地で仲間と遊んでいたはずなのに……〟そんな私の思いと



は裏腹に、保育者の手を借りながら実際に組み立てていくのは周囲の人たちで、結局A男はその後も積み木を積むことなく、基地は見事にできあがっていったのでした。すると、

「よし、ヒーローショーやるぞ！」

と、再び声を張り上げるA男。しかし、遊びのイメージを言葉にして友達の共感を呼び、その場をリードしていったのは、一見おとなしそうに見えるE男でした。私は、A男に対して自分がこれまで思い描いてきた姿と、実際の姿とのズレに少なからず動揺してしまいました。

その翌日、またしてもA男はホールにやってきました。その日は他のメンバーの登園が遅く、A男と私は二人で基地づくりに取り組むことになりました。A男は初め、

「仲間がいないと基地はつくれないんだよね～」

と、もっともなことを言っていましたが、やがて、

「B男とC男がいれば、こんなの簡単にできちゃうのにな……」

と、ぽつり。B男・C男とは、昨年のクラスでいつも行動を共にしていた友達のことです。これにD男を含めた四人は、昨年からホールで五歳児のつくる基地を真似ていて、二学期には自分たちで二階建ての基地をつくり始めていました。でも、A男の話では、実際に動いて組み立てていたのはB男とC男とのことでした。

当時担任であった私はおそらく、A男が『友達と一緒に活動的に遊ぶ』姿を捉え、そこで満足し安心していたのだと思います。しかし、それではA男の『遊びのイメージを自分なりに言葉や形に表してみる』という点に関しての捉えが不十分であり、A男の抱える課題に迫りきれていなかったのではないかと反省するに至りました。さらに、その姿をフリーの保育者が捉えていたとしたら、保育者同士の情報

交換のもち方を見直す必要があるのではないか、とも考えさせられたのでした。

子どもとかかわる誰もが一保育者

私は、昨年は担任、今年はフリーと、立場を変わって保育実践をすることで、子どものより多様な面や、保育者自身の抱える課題も見えてきたと思っています。この経験を通して、子どもの育ちを保障するために、今の私にできること……。それは、フリーの立場から見える子どもの育ちや直面する課題を、担任保育者に確実に伝えていくことであると考えています。子どもたちは、園生活において様々な場や人・ものを求めて動き、出会った先々で自分を多様に表現しています。ですから、担任の前で表す姿、フリー保育者の前で表す姿が違ってくるのは当然かもしれません。その点も踏まえながら、フリーの立場で感じ考えたことを、担任と共有していくことは欠かせないと思います。

そのためには、これまでも保育者間の情報交換は行ってきていますが、さらに、保育者がお互いにどんな立場であろうと、一人ひとりの子どもの育ちに責任をもち、対等に育ちを支えていく存在であるということを明確に意識化した上で、情報交換のあり方を工夫していく必要があるでしょう。どちらかが一方向的に尋ねるのでもなく、伝えるのでもない、お互いにその情報の中に一人ひとりの子どもの育ちを確かに見取って共感・共有していく、そういう保育者間の連携が有意義であると、改めて思います。

担任とフリーの立場をこえて目指すもの……それが、子どもの充実した生活とそこに実現する健やかな育ち……であるとするならば、子どもにかかわる誰もが、一保育者としての責任をもつのであり、そのことをこれからも常に意識し続けたいと思うのです。

（駒場幼稚園）

働く意欲が持てない？(2)
―ニート、フリーター―

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から　十一月号掲載の続き〉

耳塚　寛明

(4)変わる高校生文化

高校生にしても、実は相当に変化をしております。かつてと比べると、学校生活が若者の生活に占める比重というものが非常に小さくなってきました。学校で過ごす時間自体も短くなっていますし、また、友人も学校の外へと広がりを見せるようになりました。

フリーターを輩出する高校におけるデータですが、平日に家や塾で勉強を全くしない生徒は76・3％。病欠・忌引き・公欠以外の欠席日数（ほぼ十か月間で）が五日を超える者が22・5％。遅刻を21回以上した生徒が26％。赤点が一つもない生徒が44・8％というデータが得られました。勉強するというのは基本的な

生徒としての役割。学校に行く、休まないというのも基本的な生徒の役割。遅刻をしないなども同じです。こういう基本的な生徒としての役割を、十分に遂行する者たちが少なくなってきて、そこから逸脱をする生徒たちが現れるようになってきました。

では、基本的な生徒役割から離脱をして、一体その高校生はどこに行ったのかといえば、それは消費文化への接近ということになります。学校の外、それも消費文化への接近です。最近二か月間のバイト代の合計というのを採集しましたら、平均七万四千円。これはアルバイトをしている生徒たちに限ってです。通常の期間中ですが、この調査対象校では、二か月間で六割の生徒がアルバイト経験をもっていました。大半が販売サービスです。そこで稼いだ額が二か月で七万四千円ですから、一か月でいえば三万七千円。十五万円以上稼いだ生徒も15％近くいました。

これは相当な額であり、月に平均三万七千円のアルバイト収入です。家からもらう小遣いの平均が七千円で、合わせると四万四千円になります。彼らは大人と同じ程度に、一人前の消費生活者であるということがいえます。

アルバイトをしていても、それぐらいのお金は少なくとも稼げるというわけです。こういう消費生活を維持することが、高校卒業後の最も優先順位の高いこととなるわけです。

アルバイトを通じてどう思ったか、ということを尋ねてみると、「働くことのおもしろさを感じた」は、とてもあてはまる、まあてはまるは65・7％。これはアルバイトが職業意識の寛容に役立つという側面を表しているといえます。「お金を稼ぐのは大変だと思った」84・2％。これも結構なことです。しかし反面、「正社員になってもつまらないと思った」という生徒が60・5％。「バイトでもなんとか暮らしていけると思った」というのが32・6％。これが多いと考えるか少ないと考えるかは別ですが、少なくとも三割を超える生徒たちが、バイトでもなんとか暮らしていけ

ると思うわけです。アルバイトというのは、職業意識という観点からみれば両面性をもちますが、少なくとも、フリーターとして世の中に出ていく、心の手引きをしている側面というのは否定できないであろうと考えます。

私は大都市圏を中心に、このような脱生徒役割、生徒役割を逸脱して消費生活にウエートを置く高校生が現れてきた現象を、「パートタイム生徒の登場」として捉えています。四六時中生徒というわけではなく、時折生徒という役割を演じるという意味でのパートタイム制度であります。これは、高校生文化のうちに、無業者への道を準備させるという要因として考えていいというふうに思います。

四家庭的背景・教育選抜と高卒無業者

(1)誰が無業者になるか

もう一つ重要なのは、誰が無業者になっていくかという問いです。少なくとも高卒者の問題として捉えてみると、相対的に低い階層から無業者が出現しているということは、データから裏付けることができます。

たとえば、我々が実施した調査でも、ホワイトカラーの家庭の出身者でフリーターとなったのは14%、ブルーカラーの家庭の出身者だと31%というデータがあります。要するに、同じ高卒者の中でも、フリーターやニートになったのは、相対的に低い社会階層の出身者であったということがわかっています。

(2)なぜ、無業者になるのか

①「選抜」の帰結

なぜ相対的に低い階層の出身者が、高卒無業者となりやすいのか。相対的に低い階層を出自とする生徒たちが、高卒労働市場逼迫(ひっぱく)の直撃を受け、さらに経済的理由や家庭的背景から、進学機会を奪われるという、二重の「機会の喪失」の末に、高卒無業者となって、学校と職業世界の狭間にさまよい出ていく、というのが兆候としてあります。

そのメカニズムを考えると、第一に社会階層が学力、高校階層構造（いわゆる高校のランク）を媒介として、職業社会への移行様式と化している、つまり、教育の世界で学力に基づいて選抜することの帰結として、無業者が低階層の出身者に多くなるという仕組みがあります。

②「選択」の帰結

もう一つの仕組みは社会階層が、階層下位文化により、特定の進路の選択を促すということです。たとえば、親や兄弟姉妹がやはりフリーターとか無業者である場合が多いということに、すぐに気づきます。それで、これは選抜の結果というよりも、むしろ、自らそのような選択肢を選びとっている階層が存在するという仕組みが、ここにあることを考えさせられます。要するに、社会階層と結びついた選択の結果として、相対的に低い階層の出身者がフリーターやニートになる、というメカニズムを想定することができます。

このうちの、社会階層が学力を媒介として職業社会への移行様式と関連するというメカニズムについて、もう少し詳しく触れておきたいと思います。

私たちの研究グループが、小学校六年生の算数の学力テストを実施して、父親の学歴との関連を調査しました。そこからは、父親の学歴によって、子どもの学力には有利・不利が予め生じているということがいえます。

つまり、無業者の問題に引きつけていえば、低い階層の出身者というのは、努力が及ばないというわけではないけれども、確率的にいうと、低い学力にとどまる可能性というのは高い。そして、結果として、比較的ランクの低い高校に多くが進学している。そこから無業者の進路を選択せざるを得ない状況になる確率が高くなるという、学力を媒介にしたルートがあるわけです。

学力問題としても、非常に重要な問題を示唆している。それはどういうことかといえば、学力を基準にし

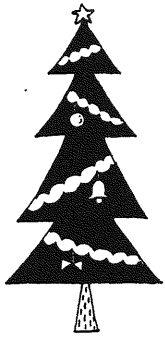
て選抜をするということです。これは正当であると、一般的には信じられています。この大学も学力テストを行って、そのうちの良い得点の生徒を採ります。

しかし、それは、さらにいえば、学力によって選抜をするということが、実は社会階層によって選抜をするということ・生徒がどういう家庭に生まれたかということによって、選抜している側面を含んでいる、ということになります。初めから、公平な競争の結果ではない要因を含んでいるということです。

もう一つの調査結果があります。私共の大学で、21世紀ＣＯＥプログラムというのを進めており、その一環として行われた、小学校六年生の算数のテスト（受験塾への通塾の有無で調べた）の結果です。受験塾に通っていない子どもたちの得点は、頂点が30点以上40点未満のところになります。ところが、受験塾に通っている子どもたちの得点の分布は、一番多いのは90点以上のところです。両者の分布は全く違うといわなければなりません。この背景には、受験塾に通塾させることができるという経済力が前提になって存在をするわけです。

父親の学歴が大卒か非大卒かによって、学力がどう違うかについての調査では、受験塾への通塾の有無ほど、学力の分布が違うわけではありません。しかし、父親が大卒の子どもたちというのは、非大卒の子どもたちに比べると、およそ20点くらい高いほうにシフトしています。

仮に、我々が実施したＣＯＥのこの調査を、私立中学校の入学者選抜試験に使ったとします。合格者はどういう構成になるか。現在の普通の学力テストをすると、そのテストで高得点を占めるのは受験塾に通塾している者、それから父親の学歴の高い者を、非常に高い率で選んでしまうということになります。この問題



は、立ち入りすぎたかもしれませんが、フリーターやニートを生むメカニズムの問題です。つまり、学力を媒介として、フリーターやニートへの選択を選び取らせてしまう道へ進ませてしまうという問題として、これらのデータを私は使いたかったわけです。

おわりに

私は、フリーターやニートという現象について、「いろいろな見方がある」「必ずしも若者の職業意識とか、働く意欲に原因を求めるという対処法は妥当ではない」「(それに伴って)若者の職業意識や意欲に働きかける政策は限界がある」ということを言いたいのです。

その限界とは、構造的な要因によります。一つは職業世界からの引き上げる力(pull)が弱くなってきていると同時に、学校教育が若者たちを職業世界に送り込む力、押し込む力(push)も弱くなっているということを言いました。

そして、このpullとpushの力が弱まった結果として、ニートとかフリーター、要するに無業者という空間に誰が引き込まれていっているのか、という問題を話しました。それは決して、誰でも同じ確率で無業者空間に吸い込まれていっているわけではない。相対的に低い階層を出自とする若者たちが無業者空間に引き込まれやすいのだということを、学力を媒介としたメカニズムと、社会階層によって選択、価値観自体が違うという二つのメカニズムによって説明しました。

こう考えてみると、働かない若者たちの問題を、ニートという言葉を使って、意欲の問題として理解してしまうというのは不十分な見方であり、問題が残ってしまう、ということはおわかりいただけたと思います。どうも、現代社会というのは、どういう現象も心に原因があるという問題として理解してしまう傾向が強いように思います。これは心理重視などの言葉でも批判されているところですが……。ニートという概念もその一つです。ニート、働かない若者たちの原因

を、若者の心に求めてしまうという、誤った解釈の仕方、それこそがニートという言葉を生んだのではないかと思います。

これは社会的に見ても問題を招きます。第一に、個人の努力によってでは、問題を解決することが不可能な状況においてでも、なお、一人ひとりにがんばれ・意欲をもてというメッセージを送り続けることになってしまう。第二に、個人の心が注目されてしまうあまり、個人を取り巻いている制度とか組織とか、構造という言葉を使いましたが、その構造のあり方に、人々の関心を向けない、向かないという状態が生まれてしまう。そのために本当の原因をつくり出している構造に対する改革が、一向に進展しなくなるという結果を招いてしまいます。

ニートには、引きこもり型というイメージが付与されているのです。しかし、雇用される機会がない、機会が乏しい時に、引きこもってしまうのは若者だけの問題でしょうか。そんなことはありません。我々大人でも、困難に直面した時に、つい引きこもる、やる気がなくなってしまって、引きこもらざるを得なくなる状況に置かれるわけです。つまり、引きこもりのイメージが与えられて、結果として、そういう若者は現れるかもしれません。それは若者自身の心の問題として解釈していてはいけないのではないか、と主張したかったわけです。

ニートという概念を通して、見なければならないのは、今の若者の心の欠陥ではなくて、数十万にも及ぶ若者をニートへの道へと向かわせてしまう、脱出を困難にさせている社会の仕組みのほうだということを申し上げたかったのです。

〈了〉

（お茶の水女子大学）

（講演　平成十八年二月十六日）

☆抄録責任　編集部

幼児の教育　第一〇五巻（平成十八年）総目録

◇第一号

巻頭言「子どもの存在意義」の確認のために　本田　和子
特集〈いぬ・戌〉
子どもとペット　横山　章光
日本古典文学におけるいぬ―近世俳諧の戌・犬を中心に　東　聖子
ポチの散歩道　飯利美知子
子どもの本に登場した犬―信じるということ―　大澤　啓子
文化の起源としての共感性　刑部　育子
私が通った幼稚園・保育園(8)　佐伯　一弥
流されずに生きる　津守　眞
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(10)　庄籠　道子
かめきち探検隊　佐藤　寛子

◇第二号

巻頭言「総合施設」創設に思う　神長美津子
幼児教育の独自性はどこにあるのか(6)　矢野　智司
子どもたちの今を考える　田中三保子
親が歌えば、子どもは笛吹く　小林　頼子
秘められた物語　佐々木　晃
幼児教育と交流活動　倉持　清美
田口恒夫先生　追悼　田口先生　あり がとうございました　増井美代子
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(11)　庄籠　道子
私が通った幼稚園・保育園(9)　入江　礼子

◇第三号

巻頭言「子どもの世界を楽しむ」　岸井　慶子
反抗期の親子　高濱　裕子
保育「方法」考(二)　戸田　雅美
カリフォルニア滞在記(一)　岩立　京子
私が通った幼稚園・保育園(10)　豊田　一秀
特集〈たね〉
植物の育成になぞらえた育児論　藤田　博子
青年海外協力隊で育った種　佐竹　直子
乳児の『たね』は生活の中に　濵口　敦子
永遠の情景　中嶋　正敏

高尚な精神を育てる教育　津守　眞
たけのこ幼稚園とラジオのおっちゃん(12)　庄籠　道子

◇第四号

巻頭言 保育雑感 幼児の社会性とは何か　鯨岡　峻
特集〈入園〉
幼稚園入園の頃―穏やかな母子分離と子どもの時間を保障したい―　向山　陽子
子どもたちの夢を紡いで―幼児期の学びのもつしなやかさとたくましさに乾杯！―　佐藤　暁子
「つながる」ことを大切にして　高梨　智子
新しい出会いのとき　吉岡　晶子
ある日
長期化する人生の各ステージの位置づけ　本田　和子
保育の変革を目指して(1)　入江　礼子
大いなる足跡　高橋　麗子
私が通った幼稚園・保育園(11)　冨士原紀絵

◇第五号

巻頭言 診断名がつかないと子ども理解はできないか？　山崖　俊子
端午に寄せて　林　直輝
親子関係をGewaltという視点から考える　小玉　亮子
児童学からの出発(2) 子どもの魂との対話　安島　智子
前進のイメージ　津守　眞
私が通った幼稚園・保育園(12)　小林　美実
カリフォルニア滞在記(二)　岩立　京子
幼稚園百三十年記念企画
アーカイブズ『幼児の教育』(1)　村石理恵子
もういっこ

◇第六号

巻頭言 もしも　雨が降らなかったら　吉村真理子
特集〈雨の日の保育〉
雨も悪くない　中野　圭祐
雨の中に昨日が見える　明日が見える　菊地　知子
雨の日こそ園庭へ　當銀　玲子
しゅんちゃんの雨の日　川崎　徳子
子どもたちの学び　小林　頼子
児童学からの出発(2) 現代おもちゃと子どもの世界の文法 その一　森下みさ子
保育の変革を目指して(2)　入江　礼子
幼稚園百三十年記念企画
アーカイブズ『幼児の教育』(2)

◇第七号

巻頭言 子どもの意見に耳を傾ける世の中を創ろう　安部富士男
天国からの種　津守　眞
父の叱り方　土屋　賢二
子どもの脳は今？(1)―ゲーム脳について―　坂元　章

「子どもの見る眼」から「子どもを見る眼」へ　恒川　直樹
ゆっくり星を見ませんか？　田中　千尋
児童学からの出発(3)　現代おもちゃと子どもの世界の文法　その二　森下みさ子
カリフォルニア滞在記(三)　岩立　京子
新たな出発の年を振り返って　松永　聖子

◇第八号
巻頭言　保育者であること　その生と死を生きる　榎沢　良彦
特集〈緑蔭図書紹介〉
哀しい うたびと―西條八十―　登坂　秀樹
身体を介して世界とかかわる子どもの姿を描く　砂上　史子
ヴァージニア・リー・バートン『ちいさいおうち』の作者の素顔　美谷島いく子
物語の内と外　幼稚園の春　青柳　宏
保育巡回相談を担い始めて　田代　和美
子どもの脳は今？(2)―ゲーム脳について―　坂元　章
保育の変革を目指して(3)　入江　礼子
子どもが「遊ぶ」経験を問う　横井　紘子
一人ひとりの楽しみ方　高橋　陽子

◇第九号
巻頭言「子どもの最善の利益」について思う　阿部　和子
ある日
特集〈遠足〉
『遠足』百景　永倉みゆき
宿泊保育の取り組みから　山路　純子
広い空の下で　目羅　藍
十一月二日　千葉「加曾利貝塚博物館」遠足日記　鈴木　眞廣
女性の心と体に忍び寄る危険(1)―思春期から青年期へ―　大森　美香
流れるイメージと、流れをつくるテーマ　津守　眞
私が通った幼稚園・保育園(13)　伊集院郁夫
幼稚園百三十年記念企画　アーカイブズ『幼兒の教育』(3)　本間万里子
「恩師」との出会い　高橋　和子

◇第十号
巻頭言　からだの主人公になる
特集〈運動会〉
〝うんどうかい〟から〝運動会〟へ　甲斐久美子
運動会と保育学的想像力　太田　光洋
小学校と運動会　井ノ山正文
日常の中の運動会　佐藤　寛子
子どもたちの装い　小林　頼子
女性の心と体に忍び寄る危険(2)―思春期から青年期へ―　大森　美香
保育の変革を目指して(4)　入江　礼子
私が通った幼稚園・保育園(14)　新開よしみ

◇第十一号
巻頭言　いのちを繋ぐ　土屋　とく
特集〈日本の幼稚園教育百三十周年を迎えて〉
手引書『幼稚園』の原書とその入手経路について　大戸美也子
日本における幼稚園教育の確立―保育会の果たした役割―　湯川嘉津美
引き継ぐ覚悟　松井　とし
幼稚園百三十年記念企画
アーカイブズ『幼児の教育』(4)
働く意欲が持てない？(1)―ニート、フリーター―　耳塚　寛明
差異を差別にではなく学びへと転換する　津守　眞
木育フォーラムを振り返る　高橋真由美
「つながり」と「育つこと」　吉川はる奈
保育の中のつながりを求めて　伊集院理子

◇第十二号
巻頭言　子どもの表現への大人のかかわり方　加藤富美子
特集〈保護者の保育参加〉
「お誕生日保育」で深まる絆　藤井　修
みんなでみんなを育てようの精神で　中村万紀子
「お父さん・お母さん先生」の活動を通して　寒河江よう子
幼稚園百三十年記念企画
アーカイブズ『幼児の教育』(5)
保育の変革を目指して(5)　入江　礼子
小学校の現場で感じたこと―副担任としてのささやかな実践―　斎藤　美和
私が通った幼稚園・保育園(15)　坂本　起一
担任とフリーの立場をこえて　杉浦真紀子
働く意欲が持てない？(2)―ニート、フリーター―　耳塚　寛明
幼児の教育　第一〇五巻（平成十八年）総目録

幼児の教育
第一〇五巻　第十二号
（二〇〇六年十二月号）
定価五五〇円（本体五二四円）

発行　平成十八年十二月一日
編集兼発行人　浜口　順子
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

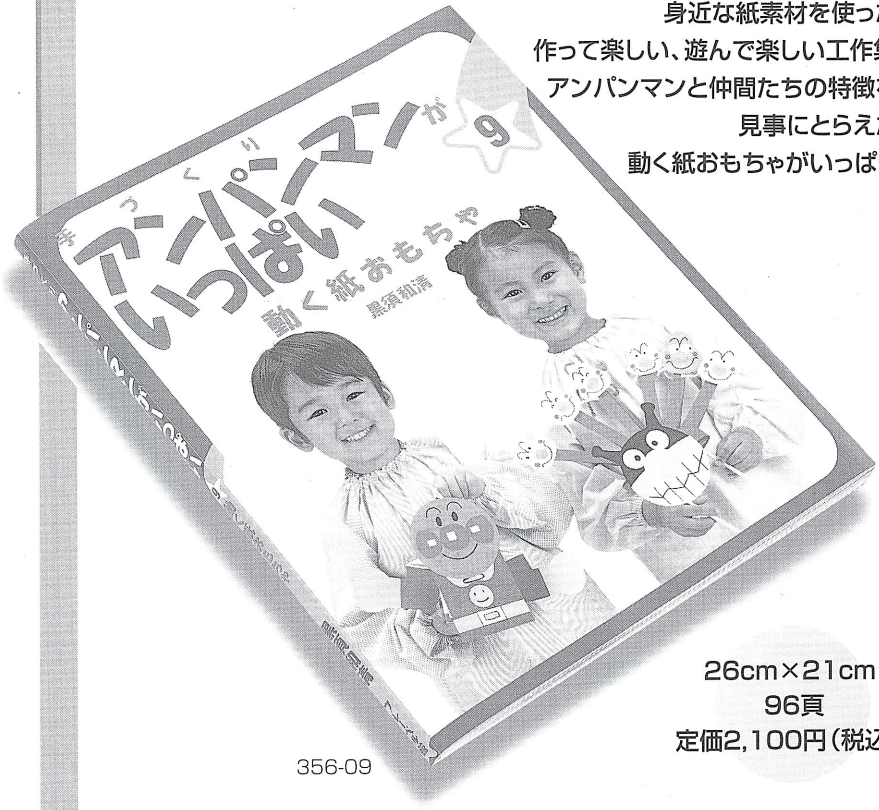
☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

最新刊

手づくり アンパンマンがいっぱい 9 動く紙おもちゃ

黒須和清　著

画用紙や牛乳パックなど
身近な紙素材を使った
作って楽しい、遊んで楽しい工作集。
アンパンマンと仲間たちの特徴を
見事にとらえた
動く紙おもちゃがいっぱい!



26cm×21cm
96頁
定価2,100円(税込)

356-09

●収録作品●

ガッツガッツだアンパンマン／バイキンUFOのびのびキャッチ
じたばたバタコさん／ダンシングホラーマン／フリフリメロンうちわ
ごしごしはみがきまん　ほか

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇五巻　第十二号　平成十八年十二月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

フレーベル館 創業100周年

おかげさまで キンダーブック創刊80周年

1927年（昭和2年）に創刊された保育絵本『キンダーブック』は、2007年に80周年を迎えます。幼いころに手にしたご記憶のある方も多いことでしょう。
創刊以来、3世代、4世代にわたる長年のご愛顧ありがとうございます。
今後も、子どもたちの“生きる力”を養う確かな内容で、お届けしてまいります。

創刊号　1927（昭和2）年

1930年代

1940年代

※時代を反映して一時期誌名が変わりました

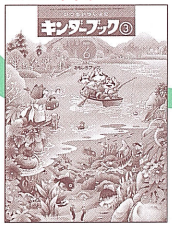
1980年代

1970年代

1960年代

1950年代

1990年代



現在　2006（平成18）年

1・2・3歳向

5～6歳向

3～4歳向

1～2歳向

3～4歳向

4～5歳向

4～5歳向

2～3歳向

100th フレーベル館　80th キンダーブック

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五二四円）☆